

## 【学位論文審査の要旨】

本論文について、審査員が特に高い評価を与えた点は以下の3点である。

### 1) 日本語教育における研究テーマの新規性

日本語教育の分野では、当該テーマの研究はほとんどなされていない中、関連する領域研究の流れを追って本研究の位置づけを行い、日本語学習者を対象に研究を進めることで新規性の高いテーマ設定となっている。視覚情報がある方が聴解の成績が高くなる、ということは、認知科学分野でも言われており、一般的には情報の種類が多い方が理解度が高くなるとされている。筆者は、そのことに対して疑問を持ち、日常の日本語での対面聴解場面を想定して条件を整え、視覚情報（特に顔からの視覚情報）が発話理解を促進するものになるか、阻害するものになるかというテーマについて新たな事実を発見したことは本研究の独自性につながるものである。

### 2) 複数の調査により疑問を探究し、対面聴解における視覚情報の影響を実証したこと

先行研究も少ない中、実験で使用する刺激作成にも工夫を凝らし、学習者の学習環境やレベルを統制した上で、調査を実施し、ひとつの調査で生じた疑問について条件を変えて追調査、探究する研究姿勢により、対面聴解における視覚情報の影響を多面的に実証し得た。具体的には、対面聴解と非対面聴解による比較、目標言語圏滞在経験有りの学習者と目標言語圏滞在経験無しの学習者による比較、刺激文の難易度高いものと低いものとの比較、学習者の日本語能力の習熟度が高い場合と低い場合による比較を行いながら、どのような場合に、視覚情報が理解を阻害するのかについて量的かつ質的に追究した。これらの複数の調査により、実証的に明らかにした研究姿勢が評価される。

### 3) 「多重資源理論」を援用した理論的な説明を行ったこと

本論文では、日本語による対面での口頭説明を理解する際に滞り歴のある学習者は話し手の主に調音に関する顔情報を内容理解の手がかりとして使用すること、しかし難易度の高い説明の場合には逆に顔情報があると理解課題に支障が生じることを明らかにしている。そして、その説明理論として認知的な「多重資源理論」を援用し、説明を試みている。つまり、聴覚情報の処理が必要とする処理資源の総量が限界値を超えた場合、内容理解課題に支障が生じるとして、調査により明らかとなった事実を理論的に説明したことにより説得力のある論となっている。認知心理学的手法を今後さらに学ぶ必要があるが、学際的領域である、日本語を対象とする第二言語習得分野にその新たな道筋をつけたことは、その先駆者として、評価されることが見込まれ、今後ますますの研究の発展が望まれる。

**【審査結果】**

本論文の公開審査は2017年7月28日の13:00-15:00にかけて、6号館313教室にて行われた。論文提出者は、審査委員による様々な角度からの質問に、的確な議論で応え、あらためて高い学術的能力を有していることを証明した。審査委員は、全員一致で、呉佳穎氏に博士（日本語教育学）の学位を授与することが相応しいと判断した。